平成 30 年 4 月 21 日

北関東フォーラム

於：シムックス

中斎塾　北関東フォーラム

平成 30 年度 第 4 回

付度

では、論語の解説を致します。あわせて時事評論を致します。本日の論語は季氏篇１の途中までです。この文章のテーマは、付度です。

【一】季氏 将に顓臾を伐たんとす。冉有・季路 孔子に見えて曰く、季氏 将に顓臾に事有らんとすと。

魯の大夫の季氏が顓臾を征伐しようとした。冉有と季路が孔子に見えて「季氏が顓臾を攻めようとしています」と告げ口をした。

季氏は魯という国の大臣で、その国を支えている大黒柱です。国家の中枢にいて、尚且つ国家の土地を自分たちで勝手に分け取りをしている人達、だいたい宰相クラスが皆そういう事をしています。

顓臾は魯の属国です。明治時代の薩摩藩を季氏と捉えると、顓臾は沖縄です。季氏はそこを攻めて、自分の直接の支配下におこうと考えた。会社で考えれば、季氏は副社長のポジションで、その親会社はいくつも子会社があって、その一つの利益を上げている子会社の顓臾を、親会社が知らないうちに自分のものにしようと企んでいる状況です。

冉有と季路は季氏に仕えている官僚です。季氏の後釜を狙っているのではなく、官僚として良いポジションに就きたいと考えている。現代に置き換えると、今、世間を賑わせている福田財務次官のようなポストにいると思って下さい。冉有と季路は孔子が送りこんでいるわけですから、孔子に告げ口をしているわけです。

孔子曰く、求、乃ち爾是れ過つこと無からんや。夫れ顓臾は、昔者 先王 以て東蒙の主と為せり。且つ邦域の中に在り。是れ社稷の臣なり。何を以て伐つことを為さんと。冉有曰く、夫子 之を欲す。吾 二臣は皆欲せざるなりと。

孔子が言いました。「冉有、お前は間違っている。顓臾という国は昔、魯の先王が地元の山神の祭主と定めたのだ。かつ、魯の国の領土の中にある。顓臾は属国としてれっきとした譜代の臣なのだ。どういう訳で季氏が征伐しようとするのか。」

冉有が答えました。「季氏が望んでおられるのですが、私達二人は賛成していません。」

この時、孔子は71歳、冉有が42歳。かなり齢の差があります。お弟子さん達を詰問している感じです。

孔子曰く、求、周任言えること有り。曰く、力を陳べて列に就く。能わざれば止むと。危くして持たず、顚りて扶けずんば、則ち将た焉んぞ彼の相を用いん。且つ爾が言過てり。虎兕、柙より出で、亀玉櫝の中に毀れなば、是れ誰の過ちぞやと。

「周任」は、周が開国した頃の大史（歴史の記録人）です。

孔子が言いました。「お前は何を言っているのだ。周任の言葉に、『位に就いたら力を尽くしてその任にあたる。出来なければ辞めるのだ』とある。君主が危ない時に支えず、倒れても助けないのであれば、宰相の役目が果たせないではないか。尚且つ、お前の言葉は間違っている。虎や野牛が檻から逃げ出し、神聖な亀の甲羅と玉が宝石箱の中で壊れていたなら、いったい誰の失敗か。」

冉有曰く、今夫れ顓臾は、固くして費に近し。今取らずんば、後世必ず子孫の憂を為さんと。孔子曰く、求、君子は夫の之を欲すと曰うを舎きて、必ず之が辞を為すを疾む。

冉有が言いました。「属国である顓臾は城が堅固で、季氏の本拠地に近いのです。季氏の力が強い今のうちにここを滅ぼしておかなければ、後々子孫の悩みの種になるでしょう。」

ここは冉有の忖度です。本音は、属国である顓臾を力づくで奪って季子の領土に併合してしまえば、主君の季子は喜んで、必ず私のポストを上げてくれるだろう･･･と、ご機嫌をとって、おべんちゃらを言っているわけです。

孔子が言いました。「冉有よ。君子は、欲しいと正直に言わずに綺麗な言葉で本音を隠すような者を嫌うのだ。」

季子は自分の勢力を拡大するために、目の前の小さな国を攻め滅ぼして領土を増やしたいと思っているわけです。冉有は主君の意向を汲んで、「それは子孫のために良い事です」と尤もらしい言葉を弄してごまかしている。それに対して孔子が、私はそういう馬鹿なことをする人間は嫌いだと怒っています。

ここから出て来るものは、官僚の忖度です。トップのご意向を図ってその通りに動く、それを忖度と言います。自分が仕えている人間がどういう事を望んでいるか、何が好きなのか、鵜の目鷹の目で観察をするわけです。明治維新の元勲の大久保利通はもともと下っ端の役人でしたから、お殿様が大好きだった囲碁を習って上達し、目をかけて貰って立身出世をし始めたのです。

上司の趣味道楽に媚び諂って立身出世のスタートを切る。これは出世の常套手段です。ですから上に立つ人間は、自分の趣味道楽をなるべく人に知られないようにすべきです。一方で、営業職であれば非常に役に立ちますね。

森友・加計問題で安倍さんは「自分は、そんなことは言っていない」と言っていますが、当たり前です。官僚が忖度していないと言えば言うほど、忖度させているのではないかと疑ってしまいますね。

今日の論語を現代に置き換えると、官僚の忖度、官僚の出世、官僚のクビという話題が出て来ます。

4/19 読売新聞 1 面に**「福田財務次官　辞任へ」**という記事があります。これは忖度の極みですね。すぐ下に、**「新潟知事が辞職願」**という記事。なぜ、女性問題で皆ひっかかるのでしょうか。出会い系サイトで知り合ったというのですから、何とも今風です。

時事評論で新聞を眺めますと、いくつか氣になる記事がありました。

・**「相次ぐ不祥事　首相、地方議員に陳謝」**（4/21　読売新聞）・・・安倍さんは首相をずっと続けようと思っているから、こんなふうに謝ったりするわけでしょう。

同じ紙面に、竹下派会長の竹下さんの記事**「総裁選　財政再建を重視」**があります。竹下さんの顔写真が大きく出ています。国会議員になった人はやはり、チャンスがあれば首相になりたいと思うのでしょう。竹下さんも、あわよくば･･･と考えて出て来たなということが顔つきに表れていると感じます。

・**「物価伸び悩み続く　点検アベノミクス」**（4/21　読売新聞）・・・黒田さんが日銀

総裁を続けるということは、安倍さんがアベノミクスは順調に行っていると言っていることになりますが、「物価が上がり、企業収益が改善して賃上げにつなげ、消費を活発にする経済の好循環の実現は見通せていない」とあります。

記事を読んでいると、＜物価上昇は良い事なのに、なかなか進まない＞という印象を与えています。世論誘導の一つの事例ですね。この書き方でよいのかどうかと疑問を持つ視点が要ります。

もう少し新聞からとり上げましょう。世の中がこれから変わっていくという前兆のような記事が結構あります。

・**「外交を変える顔分析」**（4/20　日経新聞）・・・アメリカやイスラエルの情報機関では、「フェイシャルプロファイリング」と呼ばれる顔や表情の分析が進んでいて、首脳や要人のニュース映像などから性格や精神状態、健康状態を推定し、外交戦術にも影響を与えている、とあります。

昨年４月の米中首脳会談の前には、＜習近平主席は慎重な性格で、ミスは少ないがサプライズに弱い＞ という顔分析の結果がホワイトハウスに報告されていて、トランプ大統領は会談後の夕食会で唐突にシリアへの空爆を伝えたというのです。その時、習近平さんはケーキを食べていて、とっさの反応ができないまま「幼い子どもに対してガスを使うような野蛮な相手であれば仕方ない」と攻撃を是認してしまった。中国が内政干渉を認めたということはアメリカの情報機関にとっては大きな収穫で、トランプさんが一本とった形になったとあります。

更に、すでに顔の特徴を詳細に分析する専用のソフトウエアの開発が進んでいて、人工知能の進歩で分析精度はどんどん向上していくだろうとあります。

・**「武田薬品、6.5 兆円争奪戦か」**（4/21　読売新聞）・・・武田薬品は世界の製薬会社の売上高 17 位で、22 位のシャイアーという会社を買収しようとしています。「買収額が 6.5 兆円を超え、争奪戦になる可能性がある」と書かれています。国外の会社を買収して、更に大型化をしている。ホンダもあちこちの企業に声をかけて協業化を図っている。ということで、外国とのやり取りの中で、大型化を目指す企業は、そうしなければ生き延びていけないということでしょう。国内でも吸収合併の動きが進んでいます。

ということで、今の時代は「人工知能と吸収合併の歴史」だと後々言われるような時代に入っていると感じます。

・**「ＨＩＳ副業解禁」**（4/21　読売新聞）・・・旅行会社大手のＨＩＳが社員の副業を公に認めるという記事。「勤続１年以上の正社員約 5,500 人が対象で、個人事業として行う外国人向けのガイドや通訳、翻訳などの仕事を想定。アルバイトなど他社と新たに雇用契約を結ぶ仕事や深夜労働は認めない。ＨＩＳが運営する訪日客と地元のガイドを仲介するサービスに登録し、ガイドとして働くことも出来る」ということで、本業以外の副業に道を開いたと書いてあります。どんどん多種多様な仕事の仕方が生まれて来ていると感じます。

同時に、人間のやっている仕事をロボットに置き換える動きが加速しています。同じＨＩＳが運営するハウステンボスにある「変なホテル」に泊まった話は、前に致しました。今度は浜松町にも同じホテルがオープンするというので、早速予約をしました。私がハウステンボスで体験したものが、僅かの期間でどれだけロボットのやる事が増え、洗練されたのか、その進歩を感じたいと思っています。

新聞の読み方のポイントは、ヒントになるものを見つけること。アンテナを張ってヒントになるものを見つけたら、それを調べることです。そして可能であれば実際に出かけて行くとか人に会う。自分自身の体験が必要です。体験することによって、見たものが血肉になります。紙面だけ、画面で見るものだけでは、単なる横の知識は広がるけれども、自分の血肉にはなりません。メディアから得たヒントを本物の知識にするためには、行動が必要です。

皆さんはヒントを得て、行動に結びつけていますか？　日常生活の中に、ポンと自分で意識的に石を投げてみて、違う刺激を求めるようにした方が良いと思います。そのヒントはメディア、新聞、ネットの中にあると私は思っています。ですから自分の背中を押してくれるような記事が有難いと思っています。

自然の法則に従う ― 柳は緑・花は紅

先月に続いてテーマは「師（自然）」です。天地自然を師とする事が出来れば素晴らしいということで、中村天風先生の本をご紹介します。『錬身抄』と『盛大な人生』（公益財団法人 天風会）です。『錬身抄』はご本人が書かれたものですから分かりにくいと感じるでしょうが、自然についてとても良いことが書かれています。

『盛大な人生』は天風先生が話されたことを口述筆記していますから、非常に読みやすく出来ています。この本の中に「十牛図」について詳しく書かれた章があります。「十牛図」は、悟りに至る十の段階を、牛（本性）を求める牧人になぞらえています。その九番

目「返本環源」が、自然を師匠として自然と人間が一体化する悟りの境地です。天風先生は「染めいだす人はなけれど春来れば、柳は緑 花は紅」と紹介しておられます。春になれば人間が手を加えなくても自然と柳は緑の芽を出し、花はそれぞれの色を咲かす。悟りつくして、本然の世界に返ったというわけです。

「返本環源」の説明の中で、宮本武蔵と細川公とのやり取りが紹介されています。百回以上もの真剣勝負で負けると思った事はなかったかと聞かれ、武蔵は、「私はもともと師匠から剣術を教わったものではありません。山の中で手ごろな木の枝を切って、それを何十本も吊るしておいて手当たり次第に殴りつけ、跳ね返ってくる枝を必死に避けて打ち返しながら間合いを極めたのが私の兵法です。木は恐れを感じません。けれども人間は恐れるから、向かっていく太刀を逃げます。木は逃げませんから時々私はぶたれますが、人間にはぶたれたことがありません」と言ったそうです。天風先生は、剣道の極意「突いてくる刃は受けな、流すべし。たたら踏みたらば、けさで斬るべし」と同じだと言っておられます。

自然を師匠にするというのは、ピンと来ない方もおられるでしょう。天風先生の言葉で説明すると、人間は息をしないで生きていられません。ならば、呼吸法を自分自身のものにしなさいと言っておられます。だいたい皆さん、正しい呼吸をしていません。無意識にしているものほど真剣に考えて、人間にとって大事な正しい呼吸法を学びなさい。睡眠をとらずに生きていられないのならば、正しい睡眠をとりなさい。食べずに生きていられないのなら、正しい食べ方をしなさい。・・・天風先生はそう言っておられます。

自然を師匠にするということが、漠然とお分かりいただけましたか？　禅の世界では「好語説き尽くすべからず」（良い言葉は微に入り細にわたって説明してはいけない）と申します。聞いている人が何となく分かった氣分になって終わってしまったのでは、本物になりません。自分で考える部分を残しておく必要がありますから、説き尽くさないことに致しますが、息をすること・眠ること・食べること・水を飲むこと・・・これらは皆、自然の法則に従うがよいということです。

食べ物を食べる時は好き嫌いで食べるのではなく、お腹が空いて〝食べたい〟と思った時に食べる。身体が欲して食べたいと感じた時は、好き嫌いは言いません。それが自然の摂理に従った食物の取り方です。睡眠も、眠くなったら寝るのです。眠くないのに無理やり寝ようとしないことです。呼吸は、口から吐いて、肺を空っぽにしてから吸うことです。運動も同じです。散歩を習慣にしておられる方は、したいと思った時に散歩するのがよろしいですね。コンディションが悪い時に、決め事だからとやってしまうのはいけません。

やりたくない時はやらない。身体中が心の底から欲した時にその動作をするのが、自然の摂理に従うということです。

天風先生の悟りに繋がるものは、自然の摂理に従って生きるということを命題にして、ずっと考えていく。そうすると、どこかでカチンとぶつかって自分の中で花が開く時があります。そして必ず行動に出ます。それを天風先生はこう言っておられます。「執着、煩悶、病難、運命難を人に有り得ぬもの、あっちゃいけないものとして、否定する為の方便として積極心を養わせている。しかし、本当に心が積極的になったら、消極的なものはないんだ。心が絶対なんだから。絶対の氣分になると、心はいつも動かない。」

絶対心が出来ると、宮本武蔵のように命のやり取りをする時でも、心が乱れないから斬られることもない。虎の檻の中に入っても、虎に襲われることもないというわけです。自然の状態でいると、人間も自然の一部になってしまうのだと思います。

絶対心について、天風先生は文覚上人と西行法師のエピソードを挙げておられます。

西行法師も文覚上人も武士でしたが、どちらも恋にやぶれて出家しています。西行はその後、歌人として評判を得るようになりました。伊勢神宮にお参りして読んだ歌「なにごとのおはしますかは知らねども　かたじけなさに涙こぼるる」や、「願わくは花のしたにて春死なむ そのきさらぎの望月のころ」と、情緒ある歌を沢山詠んでいます。

文覚は修行一筋の荒法師でしたから、歌を詠みながら諸国を回っている西行を嫌って、西行が寺に来たら生首をひねり取ってやるなどと言っていました。

ところが西行が行脚の途中に文覚の寺に寄ることになりましたから、お弟子さん達はハラハラしているわけです。ところが迎えに山を降りた文覚が西行と笑いながら戻ってくる。そして酒を酌み交わし、翌朝には西行を見送ったのです。不思議に思った弟子たちが文覚上人に尋ねると、「西行は自分より人物が上だ。とても敵わない」と言ったという話です。

というのは、文覚の寺には毎日のように一匹の猿が山から下りて来るのですが、その猿が傍若無人、文覚が叱っても叱ってもあっかんべをしたり尻を叩いて見せたりと、ほとほと手を焼いていました。ところがその猿が、西行の「あっちさ、行け」の一言で山に帰ってしまった。おまけに枝に止まっていた小鳥が、懐かしそうに西行の肩に乗ってじっとしている。それで文覚は、西行は自然を師匠として修業を積み、自然と一体化しているのだと西行の凄さを感じとったのです。

自然を師とするということは、小鳥が肩に止まるくらい自然の一部になれれば合格点で、

「柳は緑、花は紅」ということになるでしょう。そういう心境になると、「十牛図」の九番目「返本環源」に相当します。

　お時間が参りました。「十牛図」については、どうぞご自分で調べて下さるようお願いして、本日の講話を終了致します。